みんなの学習講座

人生の書『共産主義における「左翼」小児病』に学ぶ

人間の温かさが組織をつくる

第２回　四国ブロック

第１章　どのような意味でロシア革命の国際的意義をかたることができるのか？

（レポート要点）

・ロシア革命は資本主義が遅れているという特異な環境下で行われたが、一定の国際的な意義をもっている。

・資本主義が進んだ他の国でプロレタリア革命が勝利すると、急激な転換がなされ、ロシアはふたたび遅れた国となる。

・ロシアの革命という手本はすべての国にたいし、これらの国が避けることのできない、しかも近い将来に現れる事柄のうちの極めて本質的な何者かを示しており、ここから、ソビエト権力の国際的な意義、またボリシェヴィキの理論と戦術の基礎がうまれる。

特異なロシアと革命条件

司会（吉田）：第１章の担当は香川県協の三木さんです。この章でレーニンが伝えたかったことは何だと思いますか。

三木：なかなか簡潔に説明するのは難しいですが、レーニンは一生をかけて命の条件だとか労働者に伝えたいことを書いてきましたが、党派によってロシア革命ができるのかできないのかなど、それぞれの葛藤も書かれているので、全体の討論で理解をすすめたいと思います。

兼廣：ロシア革命が国際的であるというところの２、３認めなくてはならないことがあるというところが理解しかねるところです。確かにある発達した国が社会主義革命を起こしたら、ロシアは遅れた国になるというのはわかります。であるならロシアは資本主義がさほど発達しておらず、少し特異であ

るということだろうと思います。

須藤：レーニンは革命の先駆者ではあるものの、当時ロシアがこのままであれば、他の国が革命を起こした時に後進国になるおそれがあるということ。また、ボルシェヴィキ、メンシェヴィキは、党綱領や党の機関紙をどうすべきかなど様々な派閥があるなかで争っていましたが、１９０３年に多数派になり、マルクス主義の濃い綱領になったという経過があります。この第１章ではロシア革命の何が国際的なのかは

仲間とともに学ぶ姿勢が顕著な三木さん

まだ書かれていません。ここではロシアは特異な環境で革命が起こりましたが、革命が起こるのに必要な条件は何なのかということです。

兼廣：他の国で革命が起こることにより自国が遅れるというのは、経済的に経済圏から排除されて取引がなくなるとかあるのでしょうか。

須藤：レーニンが総括的に言っているのは、１９０３年にマルクス主義的な党綱領を作成し、社会主義政党をつくり上げていなかったら革命は成功していなかったということです。また、自然発生的に起きた１９０５年の第一次革命の失敗の経験や１９１７年２月のブルジョア革命によりソビエトという自主的な組織体が政治的な力に発展していったことが、10月のロシア革命につながったと。ロシアの資本主義は遅れていながらも、ブルジョア革命を政治的な力に転化し、今こそ労働者の力を結集してたたかうべきであると政治的判断をして四月テーゼを出し、革命へと進みました。

真の敵は誰なのか

岸本：ツァーリという人物はどういう人間だったのでしょうか。また、「ヨーロッパの資本に対しても同時に闘わなくてはならないという事情」とは一体何でしょうか。

須藤：ツァーリは皇帝です。当時のロシアは封建制ですから貴族のトップが支配し、資本主義になってもそのまま皇帝のままです。本来、目の前の敵はこのツァーリですが、民衆は政府が悪いのだと思い込まされており、厳しい生活実態を彼なら何とかしてくれると嘆願する感覚です。14万人の民衆がツァーリの前に集まった時に一斉砲撃がなされ、多くの命が奪われて初めて民衆はようやく敵が誰なのかに気付くのです。

一方でロシアの資本主義はまだまだ遅れた状態で、ヨーロッパのイギリスなどの資本主義先進国から物資的にも思想的にも攻撃を受けていた実態があり、こちらとも競争し、たたかう必要があったわけです。ここではそういったことが書かれています。

司会（吉田）：ここで、第1章を終了し、第2章に移ります。

第2章　ボリシェヴィキが成功した一つの重要な条件

（レポート要点）

・プロレタリアートの独裁が必要であり、長い、粘り強い、猛烈な、死にもの狂いの戦い、忍耐、規律、剛毅、不屈、意思の統一を必要とするたたかいなしにブルジョアジーに対する勝利は不可能。

・①プロレタリア前衛の階級意識や革命に対する献身、自己犠牲。②極めて広範な勤労者大衆と結びつく能力。③前衛の行う政治指導、政治的戦略と戦術の正しさ等の諸条件がないと、ブルジョアジーを倒し、革命党の規律は実現できない。

・正しい革命理論をむさぼるように探求し、この分野におけるヨーロッパとアメリカの「最後の言葉」（最新の成果）の一つ一つを余さず、おどろくべき熱心さと綿密さで追究した。ヨーロッパの経験との比較の半世紀にわたる歴史によって、ロシアはただ一つの正しい革命理論であるマルクス主義を真に苦しみを通じてたたかいとった。

活動家は辛いもの？

司会（吉田）：第2章の担当は徳島県協の大西さんです。全体を通して感じたことはありますか。

大西：読んでいて、「死にものぐるい」や「忍耐」など、しんどく感じる言葉が多かったですが、逆にその部分が答えであるというか、ただ単に生活やあらゆることが厳しい、苦しいというだけでは、そこから農民が蜂起するのは難しい。しっかりとした思想を持ち引っ張る存在がいて、時間をかけて農民との関わるところから組織づくりをしないと一枚岩としてのたたかいはつくれないと感じました。

司会（吉田）：私も読んでいて、本当にそんな存在になれるのかという気持になりました。

大西：人の思いにしっかりと応えることができるのかと考えた時に、自分はまだまだだなと思わせてくれる内容でした。ここまでのことをしないと社会を変えることはできないのかと。

司会（吉田）：いつも須藤学長は「活動家は自分を常に律さなければならない」と言われます。非常に難しいことで、なかなかできません。そして、大西さんの指摘した「長い、ねばりづよい、猛烈な、死物ぐるいの戦いなしには不可能であり、この戦いは、忍耐、

規律、剛毅、不屈、意思の統一を要求する」というところ、いわゆる社会主義革命をやるのであれば、プロレタリアの前衛がこういう形でやらないと勝利はない、そういう構えでないといけないというところです。

人への優しさが重要

須藤：党の規律や献身性は裏付けとしての思想が必要です。鉄の規律のような手厳しくというのではなく、人間をいかに大切にするかというのが前提です。規律は互いに守り合うためにあり、献身性とは、見えないところでも組織のために仲間のために行動を起こす。お互いに人間として生きるためにといった、人と人との関わりを介して温かみのあるものです。

私たちはただ単に厳しいたたかいをせざるを得ないのではなく、人間らしく生き続け働き続けるために仲間とともにたたかうのです。たたかうことに疲れた時にはその原点に帰ることで認識が変わるのではないでしょうか。

司会（吉田）：大西さん、少し楽になったのではないですか。学長は我々の資本主義とのたたかいは常に「人間性回復のたたかい」だと言われます。それは大衆学習運動の中で打ち鍛えられるものになると。そう考えると我々のたたかいも温かいものに感じられます。

大西：文字だけを見ると、自分を厳しく律するとともに仲間にもそれを強制していくという受け止めでしたが、そうではなく人間同士の触れ合いや関わり、温かい心があってのものだと理解できました。その意味で僕たちのまなぶの運動は間違いない運動だと思います。遠回りでも丁寧に時間をかけてつくりあげていく組織なのだと思います。ところで、疑問点があるのですが、英雄主義というのは、どういう意味ですか。人間的魅力とかですか。

須藤：それぞれが自分を律するということですね。郵政ユニオンでは毎週『おはようニュース』を配布し、一回も欠かさず20年続けました。ただし自分一人ではなし得ませんでした。ニュースは作れても、配布する郵便局に行くには、妻や仲間の送迎がなければ実現しません。その意味では誰も突出した英雄ではなく、みんなが主役だったということです。そういう認識です。

綱領の重要性とは

岸本：この時代の規律を各地域で統一するための手段は。また、当時はどのように組織したのでしょうか。

須藤：手段としては紙の弾丸と言われる機関紙『イスクラ』を手から手へ仲間のうちで回して行きました。伝言は途中で内容が変わったり間違って伝わったりするため、紙に記したのです。

司会（吉田）：広大なロシア全土に徹

自身の運動を振り返る大西さん

底していくためには人数が必要ですが、メンバーは多くいたのでしょうか。

須藤：重要だったのは綱領の存在です。広い国土のなかで人数が限られていても、それぞれがしっかりとした綱領を基に自己判断し動くことができたのです。テキストでも１９０３年のボルシエリズムになったというところは、マルクス主義に基づく綱領を党大会で決定したという重要なことをレーニンが強調している部分です。

高開：日本共産党が綱領を変更しました。プロレタリア「独裁」から「執権」への変更です。変質していっていると理解していいのでしょうか。

須藤：そうですね。

岸本：13ページ、「アメリカとヨーロッパの最期の言葉」は、12ページの最期の方にもあるように、資本主義を総括してマルクス主義を勝ち取ったという認識でよいのでしょうか。

須藤：次回詳しく説明します。

司会（吉田）：その点は次回整理することとして、続いて第3章に移ります。

第3章　ボリシェヴィズムの歴史のおもな段階

（レポート要点）

・革命の準備の年代では、三つの基本的な階級（自由主義的ブルジョア・小ブルジョア的民主主義・革命的プロレタリア）の各代表者が綱領と戦術の見解を戦わせ、来るべき階級革命闘争の準備をしてきた。

・革命の年代では、綱領と戦術が大衆によって試される。経済的ストライキ↓政治的ストライキ↓蜂起へと転化していく。その闘争の過程でソビエト的な組織形態が生まれる。

・反動の年代では、ツァーリズムが勝利し、革命政党・反政府政党が全滅。しかし、この敗北が多くの教訓を得た。

・革命運動の高揚の年代には、徐々に高揚が加速、ボリシェヴィキは合法的可能性を利用してメンシェヴィキを排除した。

・第一次帝国主義世界戦争では、議会が開かれたが革命は弾圧される。社会排外主義とカウツキー主義の悪い面を暴露しボリシェヴィキの正しさが理解されていく。

・ロシアの第二革命では、ツァーリズムの終了によりメンシェヴィキとボリシェヴィキの対決となるが、ソビエトの意義を理解しないメンシェヴィキが瓦解。ボリシェヴィキは慎重に行動し勝利する。

少ブルジョアとは

司会（吉田）：第3章の担当は徳島県協の藤川さんです。まず3つの基本的階級・政治的潮流のところからいきましょう。

藤川：ブルジョア、小ブルジョア（社民主義的）、プロレタリア（革命的）とありますが、単純に今の日本であてはめると、自民党・社民党・新社会党

津田塾での学習経験から
堂々とレポートする藤川さん

というとらえ方でよいのでしょうか。

須藤：小ブルジョア的というのは、単に社民的というのではなくて中小零細企業や土地を持った農民のように小規模でも生産手段を持っている方たちです。そういった人たちは財産を守ろうと保守的になりがちです。そして資本主義が進むと彼らの生産はだんだん立ち行かなくなって革命的なこと、極左的なことを言い出すのです。社民党とは違う。保守的なんだけども、大企業からは冷遇されて厳しい立場に置かれ、一方で保身のために革命的なことを主張するという感じです。

司会（吉田）：小ブルジョアはあくまでブルジョアの味方であると思っていましたが。

須藤：ブルジョアの一員には違いないが、小ブルジョアは庶民と敵対しているのと同時に、ブルジョアとも敵対しており、順調な時には保守的だが、落ち始めると庶民と一緒にブルジョアとたたかう他ないという存在です。

組織運動には人間の温かさが不可欠である

司会（吉田）：歴史の各段階を見ていると、順風満帆に社会主義革命はできないのだなというのが改めてよくわかりますね。

須藤：やはり活動家は、あらゆる状況に対応できるだけの心の余裕というか、仲間が何を悩んでいるのか、何に対して疑問を持っているのかという、その人の気持に寄り添う、理解しようとする構えがもっとも必要だと思います。

東口：仲間の変化に敏感に対応するということですね。

須藤：それが人間的な温かさというものです。

司会（吉田）：最後にまとめていただきました。次回は第2章の宿題と第4章を討論します。